NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　後日談　カールにて

芳流 (kaoru)

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17517218

ダイの大冒険, アバン, アバフロ, フローラ(ダイの大冒険)

本編から少し外れたCP話。まずはアバフロ。
時間としては、終章ーside Hyunckelnovel/16578483の少し前の話。
本編５novel/15367784を前提としていますが、未読でも読めると思います。
また、最終回後ですが、新アニメ75話「破邪の秘法」と「勇者アバンと獄炎の魔王」を履修済みでしたら問題ありません。

あるべき未来に進むために　後日談　カールにて

　梟の鳴く声が、窓の外から聞こえてきた。
　夜半、フローラは寝所で目を覚ました。
　物音や気配で起きてしまったのではない。何故かひどく落ち着かなく、胸騒ぎがした。
　不意に、フローラは、ベッドサイドに置いたネックレスを手に取った。
　金の鎖の先には、うっすらと青みがかった涙型の石が下がっていた。
　数年前に、魔王討伐の旅に出た勇者と取り交わしたものだった。
　魔王は倒したものの、彼はまた旅に出てしまった。
　しかし、これを預かっていてほしいと口にした彼のその言葉は、またいつか巡ってくる再会の日を予感させ、王女の心を温かくした。
　最後にまみえた日から、早くも数年が経っていた。
　初めの２年は、彼からよく手紙が届いていた。
　しかし、その後は、彼はぱったりと消息を絶っており、最後の手紙が届いてから既に数年が経とうとしていた。
　おそらくは、何か理由があるのだろうとフローラは感じていた。
　だから、彼女の側からは、彼を探さなかった。
　手紙はなくとも、彼から渡されたこの石を握っていれば、不思議と、彼の気配を近くに感じることができ、そのことが、少しだけ、フローラの心を落ち着かせた。
　だが、この日は、何故か、この石が泣き声をあげているような気がした。
　フローラは、落ち着かず、そのネックレスを首にかけた。そして、するりと寝台から滑り降りた。

　カール王宮の近くには、手つかずの森があった。

かつて、アバンと一緒にフローラはこの森に、スライムの観察に来たことがあった。彼と初めて出会ったのも、この森だった。
　だが、それは、いずれも日中のこと。
　太陽の恩恵のないこの夜は、わずかな月明かりしかなかった。
　こんな夜に一人で森に出ていることがわかったら、側近に叱られてしまう。
　しかし、それでもフローラはいてもたってもいられずに、森へと足を進めた。何故かそこに行かなければならないような気がしていた。
　しばらく進むと、少しだけ空間が開けたところがあった。
　森の木々が頭上で切れており、そこには、天から月光が照明のように降り注いでいた。
　その舞台のような空間に、ぼんやりと浮かぶ人影があった。
　この世のものではないかのようなその姿だったが、不思議と恐ろしくはなかった。
　月明かりに照らされた後ろ姿は、色がなく、白っぽく見えた。フローラは、その背中が見知った者のように思え、そっと声をかけた。
「・・・アバン？」
　その声に気付いたのか、あるいはただの偶然だったのか、その人物はゆっくりと振り返った。
　だが、逆光でその表情はうかがい知れなかった。
　フローラは吸い寄せられるように近づいた。
　そして、手が触れるかどうか、というところまで歩み寄った、その時。
　不意に、フローラは力強い腕に抱きすくめられた。温かい、人肌の温もりは、そこにいる者が幻ではなく、確かに生きた人間なのだと思わせるものであった。
　その腕は震えていた。
　そして、フローラの肩に、雫が落ちた。
　押し殺した嗚咽が耳に届いた。
「・・・泣いているの？」
　フローラは尋ねた。

だが、答えはなかった。
　フローラは、そっとその背中に腕を回し、抱きしめ返した。その背中も、震えていた。

　気が付くと、フローラは自室のベッドに横になっていた。
　室内には誰の姿もなく、窓からは朝日が差し込んでいた。
　昨夜、森に行ったような気がしていたのだが、その痕跡はどこにもなかった。
　夢だったのだろうか。
　フローラは無意識に胸元に手を伸ばした。
　すると、そこには、眠るときにベッドサイドに置いたはずのネックレスがかかっていた。
　後に「アバンのしるし」と呼ばれるようになる、その１つ目の石だった。
　戸惑うフローラの耳に、ドアをノックする音が響いた。侍女だ。
　侍女は、フローラの自室に入り、主の身支度を手伝いながら、控えめに王女に声をかけた。
「陛下、早朝から申し訳ございません。
　騎士団長様から、ご報告があるとのこと。お早くお支度をさせていただきます。」
　フローラは嫌な予感を感じ取り、侍女とともに身支度を急いだ。

　謁見の間で、玉座に座るフローラの前で、騎士団長は膝を折って臣下の礼を取った。
　彼は、早朝からの謁見という非礼を詫びると、短く報告をあげた。
「昨日、騎士団に報告が入りました。
　前騎士団長ロカ様が・・・お亡くなりになったそうです。」
　フローラの胸に、ずきりと痛みが走ったが、彼女はそれを面に出さなかった。
　ここしばらくの情報により、フローラにとっても、騎士団長にとっても予想された訃報ではあったが、それでも、あっては欲しくないと思っていたことだった。

彼女は、ぽつりとつぶやいた。
「・・・そうですか。残念です・・・。」
「・・・はい。」
　謁見の間に、亡き者を悼む重い空気が流れた。
　ふと、フローラは、昨夜のことを思い出し、自然に胸元に手を伸ばした。
　ドレスの襟元の下には、アバンから預かっている輝石を忍ばせていた。
　フローラが手を触れたその石は、意志を持たない無機物であるにもかかわらず、何故か、その石自身が、泣いているように思えた。

　フローラは、自室のバルコニーの柵に腕を乗せ、夜風に髪をたなびかせていた。
　今夜は侍女たちも下げており、人払いをしている。
　普段は女王たる彼女の周囲には、大勢の家臣や侍女たちがおり、なかなか自分を見つめる機会はない。大魔王との戦いからまださほど日が経っていないこの時期では、余計だ。
　だが、この日は、フローラは、周辺に誰も置かず、侍女たちも部屋から遠ざけ、久しぶりにたった一人の時間を味わっていた。
　フローラの眼下には、王宮が抱く森の暗い夜が広がっていた。
　以前のカール城は、広大な中庭を有していた。そこには草木が生い茂り、豊かな森となっていた。
　もっとも、人工的な森であり、フローラがかつてスライムの観察に連れ出された森とは異なる。中庭の木々は美しく整備され、その中を小径が通り、ところどころ明かりが点されていた。
　それが、かつてのカールの王宮であった。
　しかし、魔王軍の侵攻により、一度は落城したカール城には、かつての整然さはない。
　何につけても物資不足である戦後間もないこの時期では、夜、屋外に明かりをともすだけの燃料もなく、森の木々を整備するだけの人手もなかった。
　しかし、そんな中でも、かつて竜の火に焼かれたはずのカール王宮の森は、少しずつではあるが、新たな木の芽が、大地や切り株か

ら顔を出していた。
　その森の息吹が、新たに街を立て直す人々の姿を思い起こさせた。
　フローラは、小さな木の芽に、この国の復興へと向かう底力を感じていた。
　女王としての彼女は、そんなこの国の人々に強い誇りを感じていた。
　ふと、彼女の自室の扉をノックする音が聞こえた。
今晩は、側仕えの者は、皆、この部屋から遠ざけている。だから、この部屋を訪れる者はない。
　そのはずだった。
　フローラには、ドアの外にいる者が何者なのか、姿を見ずとも分かってはいた。
　しかし、フローラは、振り向きもせず、バルコニーで風に吹かれるままになっていた。
　かちゃりと、ドアが開く音がした。
　入室を許可した覚えはない。女王の私室に、夜間、断りも得ずに入ろうとは、不遜なことこの上ない。
　だが、それでも、フローラは何も言わなかった。
　それは、その無礼を許しているからではなかった。
　フローラの背後で足音がした。
　それでも、彼女は振り返らなかった。
「こちらにおいででしたか。」
　思ったとおりの声がした。
「夜間での御目通り、お許しいただきましたこと、痛み入ります。」
　フローラは何も答えなかった。確かに、今晩、私室を訪問したいという手紙は来ていたが、返事はしていなかった。
　許可した覚えはない。勝手に入ってきただけだ。
　もっとも、侍女たちを遠ざけたのは、彼女自身ではあったが。
　だが、返事をするつもりは彼女にはなかった。
　何故なら、フローラは怒っていたのだ。
　フローラの背後で、闖入者は言葉をつづけた。

「今宵は、フローラ様にお願いがあって参りました。」
　ここでようやく、フローラは声をあげた。
「お願い？」
　相手の言葉をそのまま聞き返した。
　その言葉には、失笑しかなかった。
　フローラの声に凄みが増す。
「お詫びの間違いじゃなくて？
　アバン。」
　ゆっくりとフローラは振り返った。
　その視界に、１５年ぶりに再会したばかりのかつての勇者の姿が映った。
　太い黒縁の眼鏡。
　明るい髪色は、外向きに巻かれており、かつてと同様、彼のトレードマークとなっていた。
　浮かべる表情は、以前と変わらない柔和な笑みで、年をとった分だけ、穏やかさが増したようにも感じられた。
　フローラの視界の中で、アバンは、眉根を下げ、困ったように首を傾げた。
「これは手厳しいですねえ。」
　だが、本音では何も困っていそうにない声色に、フローラはいっそう腹立たしくなった。
　久方ぶりの2人の時間に、彼女の口をついて出たのは、皮肉だった。
「まさか何を謝ればいいかわからない、はずはないわよね、貴方が。」
「ええ、それはもちろん。」
　アバンはうなずいた。
　アバンは、フローラの心情に気付いているのかいないのか、にこにこと笑みを浮かべたまま話をつづけた。
「お詫びももちろん致します。ですがまずはお願いをと思い、参りました。
　聞くだけ聞いてはいただけませんでしょうか。」
「しょうがないわね。」

フローラは、大げさにため息をついた。
　すると、アバンは、屈託のない笑みを浮かべ、思いもかけない言葉を口にした。
「フローラ様にお願いがございます。
　どうぞ、今宵一晩、このわたくしめにさらわれてはくださいませんか。」
　フローラは、虚を突かれ、言葉をなくした。
　アバンの申し出は、あまりにも唐突だった。
　一瞬、彼が何を言っているのか理解できず、即座に答えを返すことができなかった。
　フローラにしては、極めて珍しいことだった。
　フローラがきょとんとした顔のまま、返事をできずにいると、アバンは、柔和な笑みを浮かべたまま言葉をつづけた。
「もちろん、私がお守りいたしますので、身の安全は保障いたします。
　明日の朝には、必ずお帰しいたします。
　ですので、この短い時間をわたくしにいただけませんでしょうか？」
　短い沈黙が二人の間に降り立った。
　フローラは、ようやく彼の言葉の意味を理解し、そして、苦笑した。
「アバン。」
「はい。」
「私は、カールの女王よ。」
「存じております。」
「その私を、一晩さらおうと？」
「ええ。」
「大した度胸ね。
　大勇者と言われるだけのことはあるわ。」
「お褒めにあずかり光栄です。」
　建前だけの会話が流れていく。
　互いに本音をぶつけていないことは、わかりきっていた。
　フローラの皮肉にも、アバンは屈しようとしなかった。

その心根は、読めなかった。
　ここでようやく、フローラが折れた。
「いいわ。貴方の望むとおりにしましょう。」
「ありがとうございます。」
　アバンは、深く頭を下げ、臣下の礼を取った。
　その動作が、かつて彼がカール騎士団に所属していた若かった頃を思い起こさせた。
　フローラの胸に、急激に懐かしさが押し寄せる。
　だが、その感傷を面に浮かべることはなかった。
「それでは、失礼いたします。」
　そう言うと、アバンはバルコニーに出て、フローラの隣に肩を並べた。見た目よりもずっと細く小さい彼女の肩に手をかける。
　ルーラを使おうとしていることはすぐに分かった。
「アバン。」
「はい。」
「街中でのルーラは禁止よ。」
　衝突の危険があって危ないからだ。
　もちろん、そんな常識をアバンが知らないなどと思っているわけではない。意地を張っていたフローラの精一杯の虚勢だった。
　すると、アバンは、笑みを崩さないまま答えた。
「大丈夫です。街外れに出ますから。」
　それだけ言うと、アバンは、フローラに反論を許さず、直ちに高速移動呪文を唱えた。
　たちどころに、二人の姿が光となって消えた。
　主の消えた無人のバルコニーに、カーテンがはためいていた。

　ルーラで移動した先には、瀟洒な洋館があった。
「ここは、ジニュアール家の持つ別荘の一つです。
　しばらく使っていませんでしたが、手入れをして、掃除もしてあります。
　どうぞ、お入りください。」
　アバンはそう言うと、玄関ドアを開け、フローラを屋敷の中に招き入れた。

その屋敷のリビングには、大きなテーブルがあった。
　テーブル上には、蠟燭の火がともされた燭台があり、すでに皿とカトラリー、ワイングラスが並べられていた。
　いくつかの皿の上には、バゲットに生ハム、チーズ類が盛りつけられていた。
　アバンは、椅子を引くと、フローラを席に着かせた。
「少しお待ちください。お飲み物と軽食もお出しいたしますね。
　フローラ様にお出ししようと思って、とっておきのものをご用意したんですよ。」
　そう言って、キッチンとこのリビングを忙しそうに行き来するアバンは、実に楽しそうだった。
　瞬く間に、フローラの前のワイングラスに、ルビー色の葡萄酒が注がれ、ドライフルーツや塩豆などのちょっとした酒の肴が並べられた。
「お夕食後でしょうから、と思っていましたので、重いものは用意していません。
　でも、デザートならよろしいかな、と。
　アップルパイとも思いましたが、ワインに合わせるならチーズケーキかと思いまして。
　上質のクリームチーズも手に入ったんですよ。」
「お手製？」
「もちろんです。」
　アバンと言葉を交わしているうちに、フローラは、自然と、１５年前に引き戻されていった。拗ねているのもばかばかしくなり、いつの間にか、フローラは、かつての王女時代のようにアバンに接していた。
　だが、もう二人とも、子どもではなかった。
　最後に別れたときには、まだ少年と少女だった二人は、いまや大勇者と大国の女王となっていた。
　互いに、重い立場にある。
　以前のようにためらいなく接することもできない状況が二人を取り巻いていることは、お互いにわかりきっていた。
　一通りの支度を終えて、アバンも席に着くと、ふたりは、互いに

ワイングラスを掲げた。
　乾杯の合図だった。
　アバンは、フローラの前に皿を示しながら、解説を始めた。
「フローラ様にお出ししたくて、あっちこっちの市場を回ったんですよ。
　こっちの生ハムは、ベンガーナの市場で買ってきました。
　ワインは、パプニカ産とも思いましたが、やはりここはギルドメイン高地の葡萄を合わせた方がいいと思いまして。
　干し葡萄も産地は同じです。
　チーズはカールのものですね。カール北部のチーズの生産が回復していました。こっちのチーズは、白カビのものですが、フレッシュチーズもありましたから、それでさっきお話したケーキを作ったんですよ。同じ産地のものです。」
「生産が回復しているのはありがたいわね。」
「お味はどうでしょう。お口に合いますか？」
「ええ、おいしいわね。」
「ああ、それはよかった。」
　フローラが舌鼓を打つ様子を、アバンは実に嬉しそうに眺めていた。
　フローラは、そんなアバンを見つめ返した。
　１５年ぶりに見る彼は、以前よりもずっと落ち着きを備えていた。笑みを浮かべると、その目元にも、口元にも、少し皺ができ、そこにフローラは時の流れを感じた。
　もう、あの頃の少年少女ではなかった。
　アバンも。
　フローラも。
　１５年もの歳月は、ふたりの間に、太い川のような流れを作っていた。互いの知らない、築き上げてきた月日があった。
「・・・アバン。」
「はい。」
「何故、今日、私を呼んだの？」
　すると、アバンは、いつも通りの柔和な笑みを崩さないまま答えた。

「フローラ様と、ゆっくりお話がしたかったんですよ。それに、おもてなしもしたかったですし。
　もう長いこと、そんな時間が持てていませんでしたからね・・・。」
　そのいつも通りの声色からは彼の本心はうかがい知れなかったが、アバンは、最後の言葉に、ほんの少しの寂しさを滲ませていた。彼にしては珍しいことだった。
　ワインを口元に運びながら、フローラは思い出を語った。
「貴方はカールを出て２年くらいは、手紙をよくくれたわね。どこの街に着いたとか、その街の産業とか習わしとか・・・まるで紀行文を読んでいるようで、楽しかったわ。」
「それは嬉しいですね。」
「でも、あるとき、ぷっつりと途切れた。」
　アバンは答えなかった。事実だったからだ。
「何かあったのかしらと心配になったわ・・・。今思うと、あのときに、貴方はヒュンケルを失ったのね。」
　やはり、アバンは答えなかった。
　その無言の答えに、フローラは、己の予想が的中していたのだと感じた。
「その後、貴方は、カールに戻ることはなかった・・・いいえ、それは正確ではないわね。一度だけ、貴方はカールに戻ってきたことがあった・・・。
　あのときも、貴方は、大切な人を失ったのね・・・。」
　すると、ようやくアバンが言葉を返した。彼はひどく困ったような色をその面に浮かべ、照れ臭そうにしていた。
「・・・夢っておいてことにしていただけませんかね。お恥ずかしい。」
　フローラは苦笑した。
「・・・アバン、私は何も具体的に言ってないのに、それじゃあ、あれは本当に貴方だったって言っているようなものよ。」
「敵いませんね、フローラ様には。」
「もう。」
　アバンの答えに、フローラは笑みを漏らした。

そして、フローラはぽつりぽつりと、互いに空白だった時間を語り始めた。
「アバン。貴方がカールを出た後、私は女王に即位したわ。
　そして、貴方の言葉の意味をずっと考えていた。
　いまのこの世界は、本来の姿をしていないのではないか。
　人間と魔族とモンスターが互いに手を取り合う世界。
　貴方が目指していたのは、その姿だったのでしょう？」
「はい。」
　アバンはうなずいた。
　フローラには、あのロロイの谷でアバンと再会してから、ずっと尋ねようと思っていたことがあった。
　その言葉を、ようやく、彼女は口にした。
「それで、貴方の旅は終わったのかしら。」
　アバンは、ゆっくりとうなずいた。かみしめるように、ひとこと、答えた。
「はい。終わりました。」
　そして、愛おしいものを思い浮かべるように温かい眼差しのまま、彼は言葉をつづけた。
「フローラ様もご存じのことと思います。
　バーンパレスに私が赴いたとき、あの子たちは、互いに手を取り合ってこの地上の危機に立ち向かっていました。
　そこには、人間もモンスターも魔族もなかった。
　この地上に生きる者が等しく手を取り合い、協力し、困難に立ち向かう姿・・・それが、まさしく、私が目指したものでした。
　私は何もしませんでした。
　でも、あの子たちは、自然にその姿をとっていた。
　もう、私が導くことは何もない。
　そう思いました。
　だからもう・・・私の旅は、終わったんです。」
　フローラは、アバンの言葉をただ黙って聞いていた。
　彼の語ったことは、彼女も胸に掲げてきたものであった。
　フローラは、落ち着いた声で言葉を紡いだ。
「アバン。私は、カールの女王としてこの国の指揮を執ってきた

わ。
　でも、私は、日々の政務をこなすだけで精いっぱいで・・・そうしているうちに、再び、世界は大きな危機に襲われた。
　・・・私は、カールを守れなかった・・・。」
　フローラは悔し気に唇を噛んで、目を伏せた。その瞼の裏には、この国を守り死んでいった騎士たちの姿が映っていたのだろう。
　フローラは、声を落としたまま、話し続けた。
「あの砦で、もう一度立ち上がろうと思った時に、貴方の弟子たちを見て驚いたわ。
　あの子たちは、魔族やモンスターと協力し合っていた。
　自然にその姿を取っていた。
　貴方の言うとおりだったわ。
　私たち大人が辿り着けなかった世界に、あの子たちは、ごく当たり前にいたのよ。
　ああ、これが、貴方の目指したものなんだな、って思ったわ。
　だから・・・貴方自身がそこにいなくても、私は、ずっと、貴方の片鱗を感じていたわ。」
　そう言って、フローラは切なげな色をその瞳に浮かべた。
「あの子たちを見て、私ももう一度、立ち向かう決意をしたわ。
　そして、この世界を救うためならと思って・・・私は、貴方から預かったあの『アバンのしるし』をレオナ姫に渡した・・・。
　貴方だったら、同じように考えるだろうと思ってね。」
　レオナにアバンのしるしを渡したあのとき、フローラにとっては、あの輝石は唯一のアバンの形見だった。
　１５年以上もの間、彼女が胸に下げてきた半身とも言うべきあの石を、フローラはこの世界を救うために手放したのだ。
「ごめんなさい、アバン。貴方から預かってほしいと言われたあのしるしは、もう私の手元にはないわ。」
　すると、アバンは、また、困ったような笑みを浮かべた。
「おかしいですよ、フローラ様。お詫びをするのは私のはずです。」
　その言葉に、フローラも苦笑した。
「そう言えば、そうだったわね。」

しかし、フローラは、アバンに謝罪をさせなかった。
「でも、結局は、私も貴方も同じでしょう。
　個人的なことよりも、この世界を本来の姿に戻し、新しい秩序をもたらすことを重視した。
　大魔王に立ち向かうこと。
　この世界を守ること。
　それを優先させてきた。
　それだけのことだった。
　そうでしょう、アバン？」
　アバンは、困ったような笑みのまま、言葉を返した。
「敵いませんね、フローラ様には。」
「さっきも同じことを言ったじゃない。」
「だって、本心からそう思っていますから。」
　そんなアバンのさまに、フローラは、小さく笑みをこぼした。そして、再び、彼女は語り始めた。
「貴方も私も、この世界を維持し守ることを優先させてきた。
　だから、貴方が、この１３年間、何の連絡も寄こさなかったのは仕方がなかったと思っているわ。
　でも・・・。」
　いったんそこで、彼女は言葉を区切った。
　そして、非難めいた視線を、対面の元勇者に送った。
「貴方が死んだと聞いて、私がどう思うのか。
　それは考えてほしかったわ。」
　すると、アバンは、ますます困ったように眉根を寄せた。
　だが、次第に彼の面から笑顔は消え、ひどく切なげな色がその面に浮かんだ。
　アバンは、彼らしくない言葉を口にした。
「・・・自信がなかったんですよ。」
「自信？」
「私が死んだと聞いて、フローラ様がどう思われるのか、私にはわかりませんでしたから。」
「・・・私がなんとも思わないと思っていたの？」
「いえ、フローラ様はお優しいですから、かつての臣下であった私

が死んだと聞けば、悼んでくださるだろうとは思いました。」
「それだけ？」
「・・・１３年も音信不通でいた私をどう思われているのか、私には測りかねたのです。」
「・・・見くびられたものね。」
　フローラはため息をついた。もうとうに、自分の気持ちはアバンには伝わっていたと思っていたのに、そうではなかったようだった。
　フローラの方こそ、アバンの言葉に不安を覚えた。
　アバンは、そのフローラの心の揺らぎを察したのか、ぽつりぽつりと言葉をつづけた。
「フローラ様。
　私は、デルムリン島で、ハドラーを倒すためにメガンテを使おうとしたとき、ハドラーに『お前も死ぬんだぞ、それでいいのか！？』と言われました。
　あのとき、私は、どうしても、ダイくんたちを守りたかった。
　そのためには、何を捨てても惜しくないと思っていたはずなのに・・・いざ、これで死ぬんだと思った最期の瞬間、脳裏によぎったのはあなたの姿でした・・・。
　そして、結局、私は、あなたからいただいた『カールの守り』に命を救われた。
　私を生かしてくださったのは、フローラ様、いつも・・・あなたでした。」
　『カールの守り』に命を救われた。
　それは、大魔王との戦いの後、真っ先にフローラがアバンから聞いた言葉だった。
　アバンは、破損した『カールの守り』を大事そうに手の中に納めていた。
　その報告を受けて、そのときも、フローラはアバンにひとこと、こう言った。
「私が渡したもので貴方が生き永らえたのなら、それで十分だわ。」
　あのときと同じ言葉を、フローラは再び口にした。

すると、アバンは、少しだけ話題を変え、言葉を返した。
「フローラ様。覚えてらっしゃいますか？
　私は、すべてが終わったら、またあなたの元に戻ります、そのときには、勇者でも何でもない、一人の人間として、あなたにお会いしたいと、そう思うと、私はお話しました。」
　フローラはうなずいた。
「ええ。覚えているわ。」
「あのとき、私は少しごまかしました。
　ひとりの人間として・・・いいえ、本当はこう言いたかったんです。」
　そうして、アバンはゆっくりとした動作で眼鏡をはずした。トレードマークの黒縁眼鏡が、かたんと、テーブルに置かれた。
　アバンは、眼鏡を外した目で、まっすぐにフローラを見つめた。
　その真摯な視線が彼女を射抜いた。
　アバンは、静かに口を開いた。
「一人の男として、あなたにお会いしたい。」
　その言葉が、湖面に広がる波紋のように、二人の間に響き渡った。
　凪いでいたはずの二人の関係に、音もなく、水紋が広がり、波を立てた。
　アバンは言葉をつづけた。
「あのとき、あなたに預かっていただいたのは、『アバンのしるし』ではありませんでした。
　あの頃のカールの情勢では、口にすることもできなかった、私の本心です。
　それを隠したまま、私は・・・あなたにお預けしたのです。」
　アバンの眼鏡は、平和の証であった。
　彼は全力を出さずに済むときには、いつだって眼鏡をかけ、その能力を封印してきた。
　眼鏡を外したアバンをこんなに間近で見たことは、フローラはなかった。
　その動作に、フローラは、剥き出しのアバンの感情を感じ取った。

フローラは、震える声で、言葉を返した。
「・・・アバン、私はもう少女ではないわ。
　いくら貴方を紳士だと思っていても、何も思うところがなければ、今晩ここに来たりはしない。」
　アバンは、ゆっくりと立ち上がった。
　一歩、また一歩とフローラに歩み寄る。
　その動作を、フローラもまたまっすぐに見つめていた。
　アバンは、椅子に座ったままのフローラの背後に立つと、彼女の肩に両手を置いた。
「プリンセス・フローラ。」
　かつての称号で、アバンは、フローラを呼んだ。
　時計が１５年前に巻き戻される。
　アバンは、ゆっくりと彼女の肩に腕を回し、背後からフローラを抱きしめた。
「あなたをずっと・・・お慕いしていました。」
　１５年間、いやもっと前から秘めてきた言葉が、ようやく、音となって零れ落ちた。
　自分の肩に回されたアバンの腕に、フローラはそっと手を触れた。
　見た目よりもずっと太くたくましい腕だった。
　この世界を、二度も危機から救ったその手だ。
　だが、フローラにとっては、それ以上に、ずっと触れたかった、触れられなかった腕だった。
　フローラの胸に、大きな感慨が広がっていった。
　誰よりも、何よりも欲していたのに、手を伸ばすことさえできなかった。その手に、ようやく触れることができたのだ。
　フローラの頬を、涙が一筋、伝った。
「アバン・・・貴方の帰還を、ずっと、ずっと・・・待っていました。」
「はい。」
　フローラを抱きしめるアバンの腕に、わずかに、力がこもった。
「今ここにいる私は、女王ではないわ。
　今晩のこの時間・・・貴方の時間を私に下さる・・・？」

「それは、私の言葉です。」
　彼らしくなく、その言葉には熱がこもっていた。
　もうふたりとも、少年少女ではなかった。互いに何を欲しているのか、分かりきっていた。
　フローラは、うつむき、恥ずかしそうにアバンに尋ねた。
「アバン。私の別名を貴方は知っているかしら。」
「ええ。」
　アバンは頷くと、フローラの耳元で、囁いた。吐息がかかる。
「ヴァージン・クイーン。」
　フローラは、その白い頬を桜色に染めながら、呟くように答えた。
「私が独身だから、そう呼ばれているのだけれど・・・。
　でも、それは、比喩ではないわ。」
　すると、アバンは、微笑みながらも、はっきりとした声で応じた。
「申し訳ございませんが、その二つ名は、本日でご返上いただきます。」
　うつむくフローラの頤に、アバンの指が触れた。
　思ったよりも太い、剣を握る者の指だった。
　フローラは、戸惑いつつも、ほんの少しだけ、振り返った。そのまま、目を閉じる。
　カールの森で出会って、十数年。
　初めて、互いの唇が触れ合った。

　アバンのルーラは、精度が高い。狭い場所に対しても、正確に照準を合わせ、着地することができる。
　威力はさておき、この魔法の精密さに関しては、彼の右に出る者はなかった。
　アバンは、行きと同じ地点を目指し、カール王宮女王私室のバルコニーにルーラで降り立った。
　しっかりと着地したことを確認すると、アバンは、その肩から手を離した。
「ありがとう、アバン。」

アバンの手が離れると、フローラは彼を振り返り、礼を述べた。
「ぎりぎりで申し訳ありません。」
約束した明け方はすぐ目の前に迫っており、空は、藍色に輝き始めていた。
最初に提示した約束を守ろうとするその姿勢に、フローラは、十数年前と変わらない彼の誠実さを感じていた。
アバンは、気づかわし気にフローラに声をかけた。
「お身体は大丈夫ですか？」
「・・・正直言うと、今日はこのまま公務を休みたいわ。」
「・・・それは、申し訳ございません。」
恐縮するアバンに、フローラは笑みを漏らした。
もうすぐ朝日が昇る。そうしたらまた、お互いに女王と大勇者に戻るのだ。しがらみのない時間は、終わろうとしていた。
そんなことを感じていたのだから、フローラの面が曇っていたのだろう。
アバンもまた切なげに瞳を揺らした。
フローラは小さな声で、アバンに礼を述べた。
「ありがとう、アバン。
・・・今日のことは、忘れない。素敵な想い出になったわ。」
「フローラ様。」
フローラを咎めるように、アバンがその名を呼んだ。フローラは、普段とは異なる彼のその声色に驚き、アバンを見上げた。
すると、アバンは、含みのある笑みを浮かべ、片目を閉じて見せた。
「私も、もう子どもではありませんよ。
それなりに、老獪になっております。」
フローラも、つられて笑みを浮かべた。
「貴方は昔から、クセがあったわ。」
ふわりと、互いを包む空気が和らいだ。
そして、彼はフローラが思ってもいなかった言葉を口にした。
「フローラ様。また近いうちに、お目通り願います。」
フローラは、目を見開いた。
そして、しばしの沈黙の後、その言葉の意味を噛み締め、彼に尋

ね返した。
「・・・信じていいのね。」
「はい。」
　これまで、アバンは、近い未来の話をしなかった。
　互いの先行きは不透明で、まだ、状況を打開する力も周囲を説得する理論も持っていなかった１５年前。あの頃は、アバンはフローラに何も約束しなかった。
　そのアバンが、ようやく、再会の言葉を口にしたのだった。
　バルコニーから光の軌跡が飛び出す。
　フローラは、朝日が昇ろうとする中、そのルーラの軌跡を見送っていた。

　フローラが公務を休んだ翌日。
　彼女の元に、１つの決裁案件が持ち込まれた。
　それは、すなわち、アバン・デ・ジニュアール３世の正式な士官願いであった。